さくらんぼがり　5

さくらんぼがり　5

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=19961885

R-18, モ腐サイコ100, 霊幻総受け, もぶお兄さん×霊幻, 律霊

師匠総受けです。とある悪癖のある師匠です。今回は律霊です。もぶお兄さん×師匠を含みます。良ければどうぞお付き合いください。倫理がアレです。

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

さくらんぼがり　5

営業時間の１時間前に来て、霊幻はざっと床を掃く。
窓を開けて、換気をして。携帯で時間を確認した。
（テルくんが来るのは午後からか）
それまでに本物っぽい案件の予約は入れていない。
（飛び込みで来たら……ちょっと待ってて貰おう……）
チラッと芹沢の席を見て、霊幻は寂しくなる。
（……いつまでも引きずる訳にはいかんな）
が、切り替えて。

携帯を開いて、芹沢の連絡先を消した。

ついでに、茂夫の連絡先も。

（緊急連絡先も破棄しないとな）
霊幻はキャビネットの鍵を開けて所員名簿を取り出す。
芹沢の書類を取り出して、シュレッダーにかける。
顔写真の貼られた緊急連絡先の紙が、シュレッダーに飲み込まれていくのを、霊幻はぼーっと見ていた。のだが。

「おはようございます」

「……は？芹沢？」
ガチャ、とドアが開くのと、芹沢の書類が完全に破砕されるのは、ほぼ同時だった。
「……何してるんですか、霊幻さん？名簿なんか持って……って、え！？影山くんの連絡先じゃないですか、それ！」
「え、あ、」
そのまま茂夫の書類をシュレッダーにかけようとしていたのを、慌てて芹沢が止める。
「何の嫌がらせですか！ひどいですよ、霊幻さん！！」

「いやだってお前ら、もう来ねぇと思って……」
「そんなこと一言もいってないでしょう！？……まさか、さっきシュレッダーかけてたのって……」
「……おまえ、の連絡先」
はぁーっ、と芹沢は肩を落としてため息をつく。
「無断欠勤したのは悪かったと思いますけど、あんまりですよ……１週間も経って無いのに……思い切りが良すぎやしませんか？」
びく、と霊幻は身体を跳ねさせる。
「……？」
その様子に芹沢はかすかな違和感を覚えた。
「……悪かったよ。その、私物を回収しに来たんじゃねぇんだよな……？」
「違いますよ！普通に出勤です」
そっか、と霊幻は嬉しそうにはにかむ。
「じゃあ悪いけど電話番号教えてくんない……？」
「……っはあああ！？携帯からも消したんですか！？！？」
霊幻は芹沢を正視できない。
「それじゃあもし俺から掛けてたら、『知らない電話番号』として出もせずに、着信拒否してた可能性がある、ってことですか……？」
「……まあ、可能性はゼロじゃないな……」
芹沢はまたため息をついて、霊幻の手から携帯を奪い取って、自分のプロフィールを作成していく。
「……俺にとって霊幻さんはかけがえのない人なんですけど、」
ついでに茂夫のプロフィールもスマホを見ながら復元する。
「霊幻さんにとってはそうじゃ無かったんですか？」
「違っ……これは、個人情報保護の観点から……」
ぐいっと携帯を押し付けられた霊幻がしどろもどろと言い訳をする。
「影山くんの電話番号まで消して……知りませんよ？もしあなたに影山くんが電話をかけた時に、通じなかったりしたら、影山くん激怒しますよ。そうなったら誰も止められません」
「……モブはもう俺に連絡なんてしてこねーよ」

寂しげに俯く霊幻のアゴを、くいっと芹沢は掬い上げて目線を合わせる。
「今日の夕方、相談所に来るって言ってました。良かったですね、俺が連絡先復帰させた後で」
「……っ」
霊幻の瞳に困惑と歓喜が混ざる。
「あ、そろそろ１人目のお客さんが来る頃ですよ。今日は……◯◯さんか。じゃあお茶準備しておきますね」
芹沢が荷物を席に置いて給湯室に向かうと同時に、にゅっと壁から緑色の人魂が顔を出す。
「よぉ、霊幻。来てやったぜ」
「……！エクボ……！？」
「なんだぁ？キツネにつままれたような顔して」
ニヤっとエクボは笑う。
「どうした？」
「い、いや……なんでもない」
霊幻は椅子に座り直して、昨日途中で止めて帰ったお祓いグラフィックのファイルを開く。
ちょっと嬉しそうにはにかみながら手を動かす。
それを目を細めて、エクボと芹沢はじっと見ていた。

昼になって。

「霊幻さん、お昼どっか食べに……あれ」
上機嫌な花沢がドアを開けて、つまらなそうにエクボと芹沢を見た。
「……今日は結構人がいるんですね」
鞄を茂夫の机に置きながら花沢が言う。
「ああ、だから」
「じゃあ、ありがたく僕は課題させてもらいますね」
「……そうね」
帰っていいよ、という言葉を花沢の圧で霊幻は飲み込んだ。
一気に相談所の人口密度が高くなる。

（トメちゃんにしばらく休んでてって言っておいて良かった）
この後茂夫まで来るとなると、単純に報酬が霊幻は心配になってきた。
相談所に金銭的余裕は無いのだ。
それに。
「霊幻さん、さっきのお客さんが置いていった壷なんですけど……」
ぴと、とくっ付いてくる花沢。
「霊幻さん、この心霊写真、触らない方がいいですよ」
するすると腕を絡めてくる芹沢。
「……おまえら近くね！？」
「「そうですか？」」
霊幻はとにかく、２人からボディータッチと言う名のセクハラを受けていた。
「どういうつもりなんだよお前ら！」
「どういうつもりも何も」
きょとん、と花沢が霊幻を見つめる。
「今まで通りですが」
霊幻の太ももをナデナデしながら芹沢が言った。
「いや絶対！！今まで通りじゃない！！とにかくセクハラやめろ！！」
「嫌です」
「まさかの拒否！？嘘だろ！？もう警察に言うからな！？！？」
「やだなあ霊幻さん。警察が俺たちに敵うと思ってるんですか？」
ニッコリと笑う芹沢にびきりと霊幻は青筋を浮かべる。
携帯を取り出して、コール。
「──あ、もしもしヨシフ？」
「ちょっっっっっっと！待って！ください！！その人は！！ヤバい！！社長が！！出てくるからっっっっツ！！」
「うるさい。……うん、そう能力者系のトラブル。いやセクハラ相談なんだけどさ……わり、ちょっと待って」
霊幻は携帯のマイクのあたりを押さえて相談所の入り口を見る。
そこには、気まずそうに茂夫が立っていた。

「……モブ」
「師匠、……その、無断で休んですみませんでした。電話もしてくれたのに……」
「無理に来なくていいんだぞ」
「え、っ」
茂夫はたじろぐ。その目に、花沢が座っている自分の机が映った。
「俺はそれだけのことをしちまった。……縁を切られても仕方のないようなことだ」
「……どうして、」
茂夫は霊幻のデスクに駆け寄って、バンと天板を叩く。
「どうしてそんなに簡単に僕を捨てられるんですか！！アンタにとって僕は、その程度の人間だったのか……！」
「ひと、ぎき、の悪い」
ぐっ、と眉に皺を寄せた茂夫の目に涙が滲む。
「……愛してるんです。どうかせめて、側に居させてください」
その真剣な瞳に見つめられて。
大きく動揺した霊幻の喉が、かひゅ、と嫌な音を立てた。
「師匠！？」「「霊幻さん！？」」
霊幻は首を押さえて椅子から転げ落ち、床にうずくまる。カラカラと携帯が床を滑っていった。
「過呼吸だ！霊幻、ゆっくり吐け！」
「はっ……はーっ、はーっ」
霊幻の手が自分の鞄を探る。
ひっひっはっ、ひっひっはっと引き攣った呼吸を頻繁に繰り返しながらも、鞄から引っ張り出した薬シートをペキって、取り出した薬を霊幻は口に押し込んだ。
「はぁーっ、はぁー……すまん、変なとこ見せたな」
霊幻は通話の切れてしまった携帯を掴んで懐にしまい、椅子に座り直す。
「霊幻さん……過呼吸よくあるんですか？」
「あ？いや、たまーにだよ」
「だって、さっきの、病院の薬ですよね？そんなのよっぽど頻繁じゃなきゃ出されないんじゃ……」

「……あっ、もうこんな時間だぞ！！予約もねぇし、ほらほら、みんな帰った、帰った！」
霊幻はあからさまに話を逸らし、逃げの姿勢に入った。
「……分かりました。今日の所は帰ります。また明日も来ますね」
「おー」
そう言う茂夫にホッとしたように霊幻は肩の力を抜く。
「芹沢も、明日も来れんのか？」
「言ったじゃないですか、これまで通りだって」
「……そっか。じゃあ、テルくんは」
「明日も来れます。大丈夫ですよ」
「……あー」
霊幻は、来なくてもいい、という言葉を出させて貰えない。
「じゃあ、うん、また明日。芹沢、施錠頼むわ」
「これから予定があるんですか？」
「うん、ちょっとな。じゃ」
ひら、と手を振る霊幻に、芹沢は会釈する。
「ええ、お疲れ様です、新隆さん（・・・・）」
ぱたん、と扉が閉められた相談所で、彼らは目配せする。
「えー、では」
こほん、とエクボがかしこまって咳払いする。
「第二回、霊幻新隆被害者の会を開催する」
芹沢、花沢、そして茂夫は、応接ソファーに座った。

※

「……出ねぇな」
霊幻はヨシフへの電話を諦めて、コールを中断する。
「まぁ、また今度謝ればいいか」
相談所内の騒ぎが聞こえていたとすれば、心配させたかもしれない。それも含めて謝ろう、と霊幻はひとりごちる。
それはそれとして。
「……あ、もしもし？うん、いつものラブホな？分かった、すぐ行くわ」

霊幻は電話しながら歩いていく。
この間、茂夫やエクボを連れて行った、ラブホに入った。
「待ち合わせです。何号室？……１０１な。すみません、１０１で」
フロントで確認後、開錠してもらって、霊幻は電話で指示された部屋に向かう。
ぱくん、と携帯を閉じて、部屋に入った。
かちゃ、と扉を施錠する。
「今日はどんな子？」
霊幻が尋ねると、ベッドに座っていた茶髪の男性が顔を上げた。
「発展場で、隅の方で縮こまっててさ。ちょっとヒョロい子。どうしたのって声かけたら、みんないい身体してるしチンポでけーし、自信無くして小さくなってたって言うのよ。で、話を聞いてみたら、タチやりたいんだけど経験なくて、それもあって遠慮してたって言うから」
「ふんふん」
霊幻は目をキラキラさせて聞いている。
「童貞捨てさせてくれるやついるんだけど、って言ったら乗ってきてな」
「さいっこうだな！」
にやにやしながら霊幻はスーツの上着を脱ぐ。
「あ、先に仲介料払っとくわ」
「いや、今日は身体で払って」
霊幻は手を引っ張られて、男に押し倒される。
「……俺、童貞じゃないと勃たないんだけど」
「そんなの分かってんよ。いいよ、ナカイキはできんだし」
「ナカイキするとしんどくなるから、本番前にできればしたくなっ……ん……」
男に口付けられて、霊幻は言葉を封じられる。
器用に男は片手で霊幻のベルトのバックルを外した。
「はぁ……仕方ねぇな……通りで待ち合わせ時間がいつもより早いと思ったんだよ」
「定期的に恋しくなるんだよなー、新隆のケツアナ」

男は身体を起こしていそいそと霊幻のズボンと下着を脱がせる。
「後ろ洗ってきてんだろ？」
「……まあな」
指にローションをまぶして、男は無遠慮にぬぶっと指を霊幻の中に埋め込んだ。
「んっ」
霊幻は息をつめる。
勝手知ったる指が、早々に前立腺を捉えた。
「はー、相変わらず凄ぇ吸い付き……」
「あ、あぁっ！」
「感度も高いし、極上の身体だよなぁ、ホントに」
ぐっぐっと小刻みに指で前立腺を押しながら、男はほぅと熱っぽい息を吐く。
「俺も色んな男抱いてきたけどさぁ、やっぱり新隆が１番なんだよなぁ……」
「そ、いつは、どう、もっ！」
はぁっ、と息を逃しながら霊幻が喘ぐように返事をする。
「俺の童貞を喰ったこの身体が、忘れられないんだよなぁ……」
「あ、あ！」
ぐり、と会陰をもう一つの手で押されて、外からも前立腺を刺激されて霊幻は目を見開いた。
「ひ、ぃ！うっ、あ、あ……っ！」
「なあ新隆、これからも童貞をいっぱい紹介してやるからさぁ、タダでいいからさぁ、俺と……」
けたたましく部屋備え付けの電話が鳴る。
舌打ちして男は壁の時計を確認した。
「まだ１時間前じゃねーか！クソっ、いい所で……」
これだから童貞は、せっかちだからモテねーんだよ、とぶつくさ言いながら男はインターフォンに出た。
「……金払おうか？」
「いーよ、また今度続きやらせてくれ。……はい、ええ、部屋に通してください。待ち合わせです」
霊幻はワクワクしながら下着とズボンを履く。

「どんな子かな〜♪」
ガチャ、と扉が開いて。
その向こうには良く知った黒髪の青年が立っていた。
「チェンジ！！」
思わず霊幻は叫んでしまう。
童貞呼んだら律が来た。
「え？」
仲介の男は戸惑っている。知らない美青年が現れた上に、霊幻の知り合いっぽいからだ。
「なっっっっにやってるんだよ、律くん！！こんなトコ来てないでおウチ帰んなさい！！」
「何って……童貞捨てに来ました」
「え？え？◯◯くんは？？」
仲介の男の頭にハテナがいっぱい浮かんでいる。
「お話して、交代してもらいました」
律が淡々と返す。
「童貞だったらいいんですよね？霊幻さん」
「ちょっと、君、非常識だぞ」
仲介の男がいぶかしんで律に向かって行く。
「こういうのは信用なんだ。出て行っ……う……！？」
す、と律が男に手をかざしたのを見て、霊幻は息をのむ。
「だめだ律くん、やめろ！！」
「う……ぐっ……」
律は顔色ひとつ変えずに手をかざし続ける。
「分かった、分かったから！ヤらせてあげるから、やめなさい！！」
ぐっ、と律は手を握る。
「ぶはっ！」
仲介の男はやっと身体が自由になったようだった。
「悪い……この子と話があるから、２人きりにしてくれ。身内なんだ」
「でも、新隆……」
「頼む」

仲介の男は頭をがしがしと掻く。
「……いつもの時間には電話する。出なかったら警察呼ぶからな」
「ありがとう」
はにかむ霊幻にため息をつきながら、仲介の男は部屋を出て行った。
「……」
「……」
じーっと見つめてくる律と必死に目を逸らす霊幻の間で沈黙が落ちる。
「えーっと……何か飲む？律くん未成年だからノンアルだけど」
「いりません」
キッパリと断られてまた沈黙が落ちる。
「……いつもこんなことしてるんですか」
それを破ったのは律だった。
「モブから聞いてんだろ」
「霊幻さんからは聞いてません」
はぁ、と霊幻は小さくため息をついた。
「そーだよ。軽蔑しただろ」
「いえ、別に貴方にそんなに期待してないので」
「……あ、そ」
霊幻はベッドから立ち上がってソファーの上着を取りに行く。
「モブかエクボに言われて俺の『童貞喰い』止めに来たんだろ？ご苦労なこった」
そのまま扉に向かった霊幻に、律は手をかざす。
「……兄さんは関係ない」
怒りの乗った声に、余計なことを言ったかと霊幻はちょっと後悔した。
「アンタは僕が兄さんに言われたら何でもやると思ってるのか？」
──わりと思ってる。
とは口が裂けても言えない。
「そうは言ってないだろ」
「じゃあさっきのはどういう意味です？」
「あれだよ。俺がふしだらなマネをするのを善意で止めに来てくれ

たんだろ？って意味だよ」
「……」
くるっ、と律は手のひらを返した。
「善意、では無いと思います」
「うおっ」
ぐん、と引っ張られた霊幻はベッドに仰向けに飛ばされた。
「り、律くん？」
「悔しさは、あるかな。気付けなかったのが、悔しい。いつから
やってたんですか？こんなこと」
しゅる、と白い指が霊幻のネクタイを外す。
ヤバい、と霊幻がどっと冷や汗をかいた。
「ずっと前からだよ。出会う前からだ」
「──僕は、あなたを見ていたつもりでした。分かっていたつもり
だった。変な恩が無い分、兄さんよりもずっと、貴方のことを、分
かっているつもりだった」
ぷち、ぷちとシャツのボタンを外していく手に霊幻の焦りがつの
る。
「り、律くん？何してるの？」
「……童貞なら誰でもいいんでしょう？」
「いやそんなわけないだろ！！俺だって相手ぐらい選ぶっつー
の！！」
ピタ、と律の手が止まる。
ぴるぴる、と子猫のように震えて。
「兄さんはよくて、僕はダメなんですか……？」
ポロポロと顔を歪めて泣き出した。
「う、ぇっ！？そ、そんなわけないだろ！！」
「じゃいいですね」
ケロっとした顔に律は戻る。
「さっきの涙は何！？」
「そんなこともありましたね」
「だああ騙されたっ！！」
「人聞きの悪い……それこそ処女じゃないんですからジタバタしな
いでくださいよ」

する、と腕をシャツから抜かれて霊幻はギョッとする。
（このままだと流される……！！）
「律くん、童貞切るのに俺がおすすめじゃない理由が、ざっと考えるだけで１００はある！」
「へえ。聞いてるので言ってみてくださいよ」
ごそごそと霊幻のベルトを外しながら律は聞き流す。
「えーっと、まず、俺は男だ」
「知ってます」
「それに、美形というわけでもない」
「そうですね」
「ぐっ……更にお前より１５も年上だ」
「偶然ですね」
「……それに、処女じゃない」
「まあそうでしょうね」
「……えーっと」
「もう終わりですか？」
ジ、と律の手が揶揄うようにゆっくりとズボンのチャックを下ろしていく。
「……律くんなら、好きな子とエッチできる機会が必ずくる。振り向かないやつはいないよ。男女問わず、な。だから……」
「アンタは！！」
突然叫んだ律に、また余計なことを言ったかと霊幻は顔を歪めた。
「僕の方に振り向いてくれたことなんて！！一度も無いじゃないか！！」
絶句する。
「律くん……」
「もう黙ってください。黙って喘いでてください」
「えっ無茶苦茶いって……う……」
下着の上から陰茎をしごかれて、霊幻はいよいよ焦る。
「そ、そうだ！律くん、フェラしてあげるから、シャワー浴びてこいよ。ちんこ洗ってきて♡」
「結構です。その間に逃げる気だろ、アンタ」
「……」

図星だったため、とっさに言葉が出ない。
「そ、そんなことないよ♡」
「じゃあもし逃げ出してたら両足を切り落として僕たちで監禁しますね」
律の目がすわっている。
「ひぃっ！？」
「シャワー浴びて来ます」
霊幻は大人しく下着姿で律を待っていた。
「あれ、逃げなかったんですね」
「だって律くんは本気でやるだろ！？」
「よく分かってるじゃないですか」
ニッコリ微笑みながら律は髪をタオルでぬぐう。
「ホント、後悔すんなよ？」
大きなため息をついて、霊幻はベッドに大の字になって脱力した。
「……夢みたいだ」
律はベッドを軋ませて霊幻に覆い被さる。
口付けようとして、霊幻の手のひらで止められた。
「ファースト……じゃないかもだけど、キスはとっとけよ」
不機嫌に律は眉を寄せる。
「往生際の悪い……」
「思いやりだろーが」
律はバスローブを脱ぎ捨てて、改めて霊幻に覆い被さって手首を掴む。
「霊幻さん……」
律にとって、夢にまで見た身体だった。
「あなたがビッチだったことに、僕はちょっと感謝してます」
「っ、ん」
執拗に首筋に口付けながら熱い息を吹きかけられ、霊幻はみじろぎした。
「おかげで僕にもチャンスが回ってきた」
「あ！」
ぴり、と痛みが走って、霊幻は小さく悲鳴をあげた。
「キスマーク、つけたなぁ……っ！」

「こんなに簡単につくものなんですね」
自分が付けた跡を興味深げに律が見下ろす。
「そんな目立つとこに……っあ！？も、もうやめ……っ！」
ぢゅ、ぢゅと音を立てて律は霊幻の胸に紅い跡を散らしていく。
「……ココにもキスマークってつくんですかね？」
「ん……っ」
手首を離した律が、すり、と胸の薄い皮膚を撫でる。
「そんなの知らな……」
「じゃ試してみましょう」
「あぁ……っ！」
じゅるる、と乳首を吸われて、霊幻は思わずのけぞる。
じわ、と下着にカウパーのシミが広がったのに、律は目を細めた。
「……ついたかどうかよく分からないですね」
「ばかぁ……っ！も、いいからさっさと終わらせろよ……！」
「嫌ですよ」
「いやぁ……っ！ん、んっ……！」
もう一方の乳首を吸い上げられ、くりくりと、強い吸い上げで敏感になった、キスマーク？をつけられた乳首を指で捏ねられる。
「気持ちいいですか？」
「もっ……いいから、早く挿れろって……！」
ぐい、と顔を胸から離すように抵抗されて、律はむっとする。
「何でそんなに嫌がるんですか」
「……お前な、こーんな小さい時から知ってるんだぞ……」
霊幻は指を１センチぐらい開けて見せる。
「さすがにそれは盛りすぎでしょう」
「……痴態を見られたら……恥ずかしいだろ……」
かあっと顔を赤らめて霊幻は顔をそらす。
「かっ」
「か？」
可愛い、と言いかけたのを飲み込んで、律はため息をつく。
「……あんまり煽らないでくださいよ。酷いことをしてしまいそうだ」
「既にしてると思うんだが！？！？」

するすると律は霊幻の下着を脱がせる。
「ガン勃ちじゃないですか」
「……生理現象だ」
すっかり硬くなった色の薄い性器を律は無遠慮に握る。
「ひぅっ」
急所を掴まれて霊幻は身を固くした。
「こっちを使うことは無いんですか？」
「っ、ん、言いたく、ないっ……！」
こちゅこちゅと手コキしながら訊かれて霊幻の息が荒くなる。
霊幻は乱れる顔を両腕で隠した。
「男も女もお構いなしなんですか？どれだけ淫乱なんですか、アンタ」
「……！」
見えないけれど。
長い付き合いで、今、霊幻がザックリと傷付いたのを律は察する。
『しまった』と後悔した。
「すみません、言い過ぎました」
「……ん……」
ず、と鼻を啜る音が聞こえた気がした。
「……中、触りますね」
指にコンドームを被せて律は指を差し込んだ。
「あ、あぁっ……」
ひく、ひくと霊幻の腹がひきつれる。
「気持ちいいですか？」
「ん……」
返事なのか喘ぎ声なのかは、律にはよく分からなかった。
「……挿れますね」
「ん……いいよ」
ぎこちなく律はコンドームを性器に被せて下ろしていく。
「あ、れ？」
先端が上手く入らない。
くすっと霊幻は息だけで笑った。
「笑わないでくださいよ」

「ごめんごめん、可愛いなあって思って。……ぐっ、と思い切って押し付けてみな」
言われたままに、思い切って力を込める。
「ん……！」
「はい、った」
えもいわれぬ感動に律はじーんとする。
今、霊幻と。
セックスしてるのだ。
「ゆ、っくり、すすめて……」
「こう、ですか？」
肉壺に包まれる性器から快感が脳まで上がってくる。
ずぷん、と性急に律は腰を進めてしまった。
「ア……っ！」
霊幻の足先がシーツを波打たせ、びゅるると耐え切れず射精した。
「ところてん？ってやつですか、今の」
「ん……今、イったばかりだから、ちょっと待って……」
「……分かりました」
きゅうきゅうと引き絞る内部に挿れているだけでも気持ちいい。
動きたい気持ちを、律はぐっと我慢した。
「……いいよ。動いて？」
「はい……ッ」
ようやくだ。律は無遠慮に引き抜き、一気に奥まで犯す。
「んッ、あ、あッ、ア……！」
まずい、と霊幻は思った。身体の相性が良い。律が何も考えずにピストンしても、カリがちょうどいい所に当たるのだ。
「いい加減、顔見せてくださいよ」
「い、やだ、ぁ……っ！」
かなりだらしない顔になっている。その自覚が霊幻にはあった。
「イ、くぅ……っ！」
「！」
霊幻は思わず足で律を抱え込む。
「あ、ァッ、ア……」
イイところに律の怒張を擦り付けるために、腰がゆらゆらと揺れて

しまう。
霊幻のいやらしい腰の動きと、きゅう、きゅうと定期的にうねるナカの動きに耐えられず、律もまた吐き出した。
「あ……あ、出て、るぅ……」
「……霊幻さん……」
抜くのが名残惜しい。律は繋がったまま霊幻の頭を撫でた。
「気持ち、かったよ。律くんじょうずだった」
「……そうですか」
「好きだよ、律くん。好きになっちゃった」
かち、と律が固まったのに、顔を隠している霊幻は気付かない。
「律くんは俺の自慢の……弟子の弟だ」
「それ赤の他人じゃないですか……」
ひどいことをする人だ、と新しいコンドームを準備しながら律は思う。
童貞に自信をつけさせるために、誰にでも言うのだろう、この人は。
それが分かっていても。
律はびっくりするぐらい自分が喜んでるのを理解していて、それはどうしようも無かった。

※

若い律の精力に勝てず、霊幻は最後には気絶した。
全身キスマークだらけの霊幻の腕を、そっと律は顔から外す。
「好きですよ、霊幻さん」
その唇に、自分の唇を重ねて。
「……これでファーストキスも貴方だ」
律は自嘲するように微笑んだ。

「「「「「もう、逃さない」」」」」

続